

## 論文の内容の要旨

氏名：高橋 恵子

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：基礎疾患を有する成人細菌性髄膜炎連続例の起炎菌と転帰に関する疫学的研究

自施設の基礎疾患を有する成人細菌性髄膜炎（bacterial meningitis, BM）連続例に基づき、起炎菌と転帰を後方視的に検討した。

対象は1984年10月から2013年7月の期間に、自施設に入院歴のあるBMと診断された成人連続131例とした。選定した成人BM群を、基礎疾患を有する群と有さない市中感染の群に分類した。さらに、基礎疾患を有する群を、Group 1：3か月以内に侵襲的処置または頭部外傷の既往のある群、Group 2：慢性消耗性疾患または免疫不全状態にある群、Group 3：Group 1・2の両条件を満たす群に分類した。転帰は、Glasgow Outcome Scaleでscore 1～3を不良、4・5を良好と定義した。

131例中103例が基礎疾患を有し、28例が有さない市中感染であった。基礎疾患を有するBMは、Group 1に35例、Group 2に37例、Group 3に31例が分類された。起炎菌は、Group 1で*Staphylococcus epidermidis*が23.7%、Group 2でpenicillin-intermediate *Streptococcus pneumoniae*が12.8%、Group 3で*Staphylococcus epidermidis*が13.9%と最も多く検出された。耐性菌の割合は、Group 1で70.6%、Group 2で55.6%、Group 3で80.6%、基礎疾患を有さない市中感染のBMで51.9%であった。死亡率と転帰不良群の割合はGroup 2で最も高く、それぞれ56.8%と70.3%であった。

基礎疾患の種類・重症度により、起炎菌の分布に大きな相違がみられた。さらに、基礎疾患を有するBMは3グループのいずれも、有さない市中感染のBMに比して起炎菌は*Staphylococcus*属が多く、その耐性菌の割合が高かった。基礎疾患の存在は、BM患者の転帰を悪化させる。特にGroup 2の転帰は、極めて不良であった。発症時の年齢が高いこと、意識障害、痙攣、敗血症の合併は転帰不良に寄与する因子で

あるが、起炎菌の薬剤耐性化は転帰に影響を及ぼしていない可能性がある。また、侵襲的処置後または頭部

外傷後に発症したBMでは、発症前の抗菌薬投与が転帰を改善させている可能性が示された。